

# 伊丹福音ルーテル教会 聖霊降臨後第十二主日礼拝のしおり

## 2022年8月28日

### 前奏

#### 招きのことば：詩編 84 編 11-13 節

あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵みです。主に逆らう者の天幕で長らえるよりは、わたしの神の家の門口に立っているのを選びます。

主は太陽、盾。神は恵み、栄光。

完全な道を歩く人に主は与え 良いものを拒もうとはなさいません。

万軍の主よ、あなたに依り頼む人は いかに幸いなことでしょう。

#### 罪の悔い改めと赦しのことば

**会衆：** 私たちは生まれつき、自分中心、わがままで、心の中に本当の愛のかけらもありません。思いとことばと行いで、まことの神を軽んじて、となりびとにも愛のない、神の御前に罪人です。神様、ほんとうにごめんなさい。

私たちは祈ります。私たちが救うため あなたがお与えくださった イエス・キリストによって、どうかあわれんでください。アーメン。（短い黙祷を持ちましょう）

**牧師：** 何でもおできになる神様は、あなたのすべての罪を赦すために、そのひとり子、イエス・キリストを十字架の上で死に渡してくださいました。ですから神様の御言葉をとりつぐ務めに任じられた牧師として、今、あなたがたに宣言します。父と、御子と、聖霊のお名前によって、あなたの罪は赦されました。安心して行きなさい。**アーメン。**

### み言葉の部

#### 使徒信条

**われは、天地のつくり主、父なる全能の神を信ず。**

**われは、そのひとり子、われらの主、イエス・キリストを信ず。**

主は聖霊によりて宿り、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死して葬られ、

陰府(よみ)にくだり、三日目によみがえり、天にのぼり、父なる全能の神の右に座したまえり。

生ける人と死にたる人とを審かんがため、かしこより再びきたりたまわん。

**我は聖霊を信ず、また、聖なるキリスト教会、すなわち聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、限りなきいのちを信ず。 アーメン。**

## 祈り

愛とあわれみに満ちておられる 私たちの父なる神様、心から感謝をいたします。今朝も共に礼拝にあずかり、罪の赦しをいただき、新しいいのちをいただいて 一週間を始めます。

高慢さが私たちを不幸にしています。人に対する高慢は知らないうちに心に入ってきています。私たちのプライドも、また、その反対の劣等感も、高慢な私たちの姿です。神様に対する高慢さも私たち自身の手にも負えない、私たちの姿です。神様への恐れがなく、神様への愛がなく、神様への信頼がありません。私たち自身でその全貌を意識できていない高慢な態度から、私たちを救い出すために、イエス様は来てくださいました。イエス様はしもべのように弟子たちにひざをついてその足を洗ってくださいました。また私たちのために十字架で命を与えてくださいました。どうぞ私たちを高慢と虚栄から解放し、謙遜で柔和な心に作り変えてください。

新型コロナ・ウィルスの感染拡大を防ぐため、緊張感を保たなければなりません。その中でも全て御手にゆだね安心して、あなたの子供として 生き生きと生きる日々をお与えください。この祈りを、私たちの救い主であり 主である イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 **アーメン**

## 使徒書朗読：ヘブライ人への手紙 13章 1-8,15-16節

兄弟としていつも愛し合いなさい。旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました。自分も一緒に捕らわれているつもりで、牢に捕らわれている人たちの思いやり、また、自分も体を持って生きているのですから、虐待されている人たちのことを思いやりなさい。結婚はすべての人に尊ばれるべきであり、夫婦の関係は汚してはなりません。神は、みだらな者や姦淫する者を裁かれるのです。金銭に執着しない生活をし、今持っているもので満足しなさい。神御自身、「わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにはいません」と言われました。だから、わたしたちは、はばからずに次のように言うことができます。「主はわたしの助け手。わたしは恐れない。人はわたしに何かできるだろう。」あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生涯の終わりをしっかり見て、その信仰を見倣いなさい。イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。・・・

だから、イエスを通して賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえる唇の実を、絶えず神に献げましょう。善い行いと施しとを忘れないでください。このようないけにえこそ、神はお喜びになるのです。

## 福音書朗読：ルカによる福音書 14章 1,7-14節

安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。・・・

イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された。「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、あなたやその人を招いた人が来て、『この方に席を譲ってください』と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかって末席に着くことになる。招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

### **讚美歌 452 番**

- 1 ただしく清くあらまし、なすべき務めあれば。  
雄々しく強くあらまし、負うべき重荷あれば。
- 2 まことの友とならまし、友なきひとの友と。与えて心にとめぬ まことの愛の人と。
- 3 完全(またき)に 向かいて進まん、途(みち)にて 気をゆるめず、  
上なきめあてを のぞみ、笑みつつ たえず進まん。            **アーメン**

### **説教：「へりくだる者は高められる」**

私たちの父なる神様と御子イエス・キリストから、恵みと平安が豊かにありますように祈りつつ、御言葉をとりつぎます。

イエス様はまことの神様ですが、まことの人となって私たちの間に住んでくださいました。私たちは暮らしの中でイエス様の言葉に出会います。イエス様は弟子たちといっしょに旅をしたり、食事をしたり、人々にお話をしたり、質問やお願いを受けたりする共通体験のなかで、それを題材にして弟子たちに真理を教えました。私たちもこのようにして真理に触れます。

今日開かれている個所は、ふつう見過ごしてしまうような光景ではないでしょうか。ファリサイ派の人で民を代表する議会の議員だった人が、イエス様を含めた人々を食事の会に招待したときのことで、そこでイエス様は招かれた人々がよい席から座っていくという光景をご覧になりました。普段と変わらない情景と一緒にご覧になりながら、イエス様は人間性について、驚くべき深い洞察をもって真理をお語りになりました。それは私たちの心の中にある、高ぶり、ということです。11節で、イエス様はお教えになっていることをおまとめになって「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と言われました。

イエス様はまずこのように言われました。上席、つまり主催者の近くで、主催者に重んじられている人が座る席に、当然のように座っている人々がいます。すると、後から身分の高い人が来て、その席をゆずってください、と頼まれます。人々の間で恥をかきます。面目を保ちたいければ、まずは下座にすわって、あとで勧められて上座へ移動することです、と言われました。

確かにイエス様のおっしゃるように、私たちは人と触れ合うときに、どこか高慢です。しかし私たちの気持ちは、イエス様が高ぶらないでへりくだる者になりなさい、とおっしゃっても、いえ、イエス様、私はそこまで高ぶってはいません、と思います。イエス様がたとえを用いてお話しくださるとき、もしかしたら、と自分の心をイエス様の光で照らしてみます。

自分が神様の前に罪びとであることを示されているとき、私たちは確かに神様の御前にへりくだっています。しかし、私たちは人々の間にいるとき、ほんとうは高ぶる理由が何もないのに、いつの間にか高ぶっていることに気付きます。それは例えば、私たちが役割上与えられている権威と、自分の値打ちとがまざってしまうときに起こります。私たちが家庭や、職場や、社会や、教会で、人々と一緒に歩む中で、神様はひとりひとりに役割や使命を与えてくださっています。親として、夫として、妻として、兄弟としてとか、上司として、先生として、委員として、係として、先輩、世話係としてとか、いろんな役割と使命があります。そして、その役割を果たしていくために、神様は一定の権威というものを帯びさせて与えてくださっています。私たちは人々に仕えて、使命を果たしていくために、その権威を用いていくのです。しかし、権威を預かっていることは、あなたが人と比べて神様の御前で価値が高いとか低いと言うことと何ら関係はありません。神様はすべての人を大切にしておられます。百匹の羊の例で言いますと99匹の、安全な囲いの中にある羊よりも、むしろ迷い出た無力な一匹を探すお方です。

例えば親子の関係を見てみましょう。他の関係も同じように考えることができます。親は子どもたちに役割上権威が与えられていますが、それは子どもたちがよい家庭人、よい社会人、よい教会人としてしつけられて、成長していくために必要な、責任ある権威です。そして自分の考える最高の霊的、精神的、物質的贈り物をもって、親は子どもがまだ未熟な時から、愛と忍耐をもって最高のことをしていきます。これが使命のために権威を用いるということです。けれどもそれは、子どもたちを支配したり、子どもたちの上に自分勝手な思いを持つことではありません。むしろ、次のような気持ちで祈りつつ育てています。自分はあなたがたの親として神様から任命されて、あなたがたを託されているのだけれど、自分がその役割と使命をしっかり果たすことができるようにいつも神様からの助けと励ましをいただいています、という気持ちです。これは、高ぶらないで、へりくだって、神様に親としての愛と知恵を求めつつ、子どもたちの成長のために、与えられた権威を用いて歩むすがたでしょう。

ほんとうに私たちは、家庭でも、社会でも、教会でも、自分が与えられている使命に気持ちを込めて取り組もうとするとき、自分の弱さや足りなさや、無知や無力や配慮のなさを痛感します。自信がなくなってしまうことさえあります。神様の御前に自分中心の罪を悔い改めて、イ

イエス様によって赦され、そして新しいイエス様から与えられる愛と知恵をそのつど与えられて、世にある使命に取り組んでいきます。自分に与えられた大切な使命に、人の前で委縮しないで、愛をもって真実に取り組んでいくのです。

これはお祝いの席に招かれたときのたとえですが、イエス様はもう一つのたとえをお話になりました。今度は食事の会を催して人々を招くときの心得です。イエス様のお話は、短く端的ですので、極端な例をお話になっています。私たちとしてはつい、そこまで緻密に批判的に考えなくてもいいのではないかと、思うようなことです。けれども、日常を通してイエス様は、あまり深く考えたことのない自分の姿を、見せてくださいます。食事に招くような、よいことをするとき、それによって恩を売らないように、ということです。心の中で下心をもって、見返りを計算して人を招かないように、ということでした。

どこがわるいのだ、と思われるかもしれませんが、友情や親しみ、信頼関係を育てるために、食事に招いたり、招かれたりするのはいいことではないかと、と思われるかもしれません。確かにそうです。聖書にも例えば詩編 133 編 1 節のように、兄弟がひとつになってともに住むことはなんといい恵み、何という喜びと、言われていて、私たちが互いの違いを乗り越えて、受け入れあい、愛し合って、高めあっていくことを強く勧めています。ここでイエス様がおっしゃっているのはこのことと矛盾することではなく、むしろこのことを違う角度からおっしゃっていることです。つまり、私たちの本当の信頼関係は、お互いに求めあうのではなくお互いに与えあう交わりの中で結ばれていきます。人と出会い親しくなるきっかけは何かの利害関係の一致なども多いでしょう。しかし、その関係性が、気付かないうちに自分が得をするというような、何らかの見返りを土台にしたままになっていないか、また礼儀を理由にして、お返しのあることを当然のように期待していないか、とイエス様は迫っておられます。真実の信頼関係の深まりが難しいからです。外面的には人をもてなし、人に与えているように見えても、また、外面的には仲良く、互いに認め合って歩んでいても、その実、高ぶりの心から、計算だかく、人に何かをおしつけ、何かを求めて生きることになっていないか、というたとえです。

このあとルカの福音書 19 章には徴税人ザアカイのお話が出ていきます。ザアカイは町を訪れられたイエス様を一目見るために出ていきました。しかし、背が低かったので人ごみに遮られたと書かれています。人々は自分たちが、イエス様が愛しておられたザアカイの視線を遮っていたことには気づいていませんでした。一方、ルカの福音書 5 章には、病気の友だちを何とかしてイエス様のもとにお連れしたいと担架にのせて行った人たちの実話があります。家に着くとひとだかりがありましたが、何とかして、と工夫をして、屋根に連れのぼって、天井をはがしてイエス様の前に友だちを吊り降ろした、という友人たちの姿です。

教会に集う私たちに与えられている使命は、み言葉と聖礼典にあずかることを通して人々が罪の赦しと新しい命を受ける大切な場として教会がより整えられていくことに用いていただくことです。自分自身も恵みのゆえに招かれているところです。知らないうちに、気付かないうち

に人々を遮ってしまうことがあります。むしろ私たちは、困難を共に乗り越える工夫をして、人々がイエス様のところに来ることを喜んで助けていくのです。

イエス様は、自己中心な罪の性質を自分で気付かず、また直すことができない私たちをご存じです。どうして自分はこうなのだろうと、悩んでもどうにもなりません。死なないとなおらないからです。けれども、イエス様が私たちのかわりに、死んでくださいました。イエス様は十字架の上で裂かれたからだから流された血を、今日も聖餐において、罪の赦しの確証として私たちにお与えくださいます。神様は私たちを大切に思っておられます。私たちが滅びることを願っておられません。私たちの罪をイエス様によって赦して、私たちが赦された者として新しいのちをいきるよう導いてくださいます。イエス様に感謝をしながら、謙遜に、そして、与えられた役割や使命を、権威を用いて大胆に果たせるようにと導いてくださいます。今週一週間も、高ぶることなく、へりくだって、人々とともに幸せをつくってまいりましょう。

だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。 ルカによる福音書 14 章 11 節  
人知をはるかに超えた神様の平安が、あなたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくださいます。アーメン

### 聖餐の部

#### 主の食卓を囲み 讃美歌 21 81 番 1 節 2 節

1. 主の食卓を囲み、いのちのパンをいただき、救いの杯を飲み、主にあって我らはひとつ。

※マラナ・タ、マラナ・タ、主のみ国がきますように。X2

2. 主の十字架を思い 主の復活をたたえ 主のみ国を待ち望み 主にあって我らは生きる。※

#### 主の祈り

天にましますわれらの父よ、願わくはみ名をあがめさせたまえ。みくにを来たらせたまえ。

みこころの天になるごとく地にもなされたまえ。われらの日用の糧を今日も与えたまえ。

われらに罪をおかす者をわれらが赦すごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。

われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。

国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。

#### 設定辞

「主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、『これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました。アーメン

また、食事の後で、杯も同じようにして、『この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい』とされました。**アーメン**だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

### **配餐 讃美歌 205 番、260 番、262 番**

#### **赦しの宣言**

主イエス・キリストのまことの体と、まことの血は、あなたをきよめ、あなたを強め、永遠の命に至らせてくださいます。あなたの罪は赦されました。安心していきなさい。**アーメン**

#### **主の食卓を囲み 讃美歌 21 81 番 3 節**

3. 主の呼びかけに応え 主の御言葉に従い 愛の息吹に満たされ 主にあって我らは歩む。 ※

#### **讃美歌 249 番 献金 献金感謝の祈り**

- 1 われ 罪びとの 頭(かしら)なれども、主は わがために 生命(いのち)を捨てて、  
尽きぬいのちを 与えたまえり。
- 2 天(あま)つ御国の 民とならしめ、幹に連なる小枝のごとく、  
ただ主によりて 活かしたまえり。
- 3 妙(たえ)にも とうとき み慈しみや、求めず 知らず 過ぎしうちに、  
主はまず われを 認めたまえり。
- 4 思えばかかる 罪びと われを 探し求めて 救いたまいし  
主のみ恵みは 限りなきかな。 **アーメン**

#### **頌栄：讃美歌 543 番**

主イエスの恵みよ、父の愛よ、御霊の力よ、ああ、み栄えよ **アーメン**

#### **祝福の言葉**

仰ぎこいぬがわくは、私たちの主、イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しきお交わりが、御前に集う一同とともに、今日も、この一週間も、いく久しくとこしえまでも、豊かにありますように。**アーメン**

#### **後奏**